神戸 YWCA 夜回り準備会（仮）ニュースレター2020

活動報告書 vol.15

新型コロナウイルスと一時宿泊所閉鎖

爺無才

● 神戸市立更生援護相談所（以下更生と略）という一時宿泊施設があります。その夜寝るところがない、行く当てのない人が無料で泊まることのできる施設です。現在は一晩に約 30 人の人が泊まっています。この施設をめぐって 今年の 2 月 29 日(土)に驚くべきことがありました。

● 29 日にカトリック社会活動神戸センターが週 3 回行っている炊き出しを食べに来た 2 人の人から「更生が泊まれなくなる（外で寝るしかない）ので寝袋が欲しい」という求めがあったそうです。ネットでそれを知って驚き、夜回り準備会メンバーや YWCA スタッフにメールなどで知らせました。私自身も更生に電話し、どうなっているのか尋ねると、「新型コロナウイルス対策で、3 月 2 日から 15 日まで閉館する（29 日には口頭と張り紙で告知した)」とのことでした。「出されて、屋外で寝る人に毛布などを配布するのか、配布しないのなら、私たちの持っている毛布を近くの公園で寝る人に届けるつもりだ」と話しました。　夜回りや YWCA の人も、「ひどすぎる」と電話しました。夜 8 時ごろ、夜回りのメンバーが電話すると「検討中」という返事だったので、「まだ決まっていない」という印象を受けたそうですが、夜 10 時半ごろ再度電話をすると、閉鎖はしないという返事があったそうです。すぐに「閉鎖は撤回された」とネットに投稿すると、寝袋を渡したり、相談を聞いた人は「本当か？」と驚いていました。● 3 月 1 日（日)、更生に確認に行きました。会ってくれた職員は「自分たちも閉鎖と聞いて驚いた」「行き場のない人を放り出してどうなるんだと思った」とのことで、29 日の夜に会議があって、撤回が決まった、とのことでした。● 3 月 2 日（月)、再度張り紙の写真を撮りに更生に行きました。その時責任者は「私が知らせを誤解した。私のミスだった」と言いました。しかし、こんな重大なことを間違えるとは思えません。現場のものが責任を取らされるのは国と似ています。● 3 月 4 日、この間の経過のわかる文書を公開するよう、神戸市長宛に情報公開を請求しました。告知の張り紙（11 ページ参照）は公開されましたが、経過のわかる文書は作成していないという理由で開示されませんでした。

１年を振り返って

野々村　耀

夜回りで出会う人（野宿している人）が、減っている状況の中で、いつまで続けるのがよいか考えることがあります。僕自身は、可能なら（もうかなり年なのでいつまでもとは言えないけれど）１人でも野宿している人がいはる間は、夜回りは続けたいと思っています。しかし、見える形で野宿している人が少なくなる一方で、見えない場所で、野宿と同様、不安定な生活をせざるを得ない人のことがますます気になっています。それを念頭にこの１年を振り返り、現在の課題やテーマについて報告します。

具体的な活動は、夜回り、昼まわり、病院訪問、福祉事務所への同行（生活保護申請など）です。

夜回り　回数は１年間に 24 回（毎月２回、第２・第４土曜の夜）で、従来通りです。おにぎりかパンと飲み物を、夏は蚊取り線香、冬はカイロを届けるのも同じです。変わったこと（襲撃や追立て、病気など）がないか聞いたり、他愛のない話をしたりします。ひどく博識で多弁な人も、寡黙な人も。友だちの多い人も、私たちが訪問した時しか人としゃべることがないという人もいます。衣類や靴、寝袋や毛布も必要な方に届けています。

出会う人数は、別記の通りですが、夜回りの時間に会えない方には日曜の朝に、夜回りの時のおにぎりかパンを届けています。　夜回りで聞いたところ、何度か中高生による襲撃があったそうです。1998 年の西宮事件（襲撃された人たちが、襲撃した少年たちを殺傷した事件）のようなことにならないように話しています。反撃であっても人を傷つければ罪に問われるのですから。しかし、では襲撃されたらどうしたらいいか、答えられません。何年か前、寝ているテントに放火された人もいたのです。

追立ても２回ありました。一度はスポーツ振興会、一度は国土交通省によるものでした。「ここにあるものを期日までに撤去しなさい、しなければ当方で処分します」といった張り紙が布団などの生活用具に貼り付けてありました。気の弱い人には、張り紙は「荷物を片付けろ」ということだから、人間は移動しなくていい、と説明したところ、以前動かなかったら殴られた、とのことでした。

昼回り　夜回りの時には気が付かなかったのですが、ある日（日中に）自転車で回っていたら、偶然２か所で、「ここにいはりそうやな」と思うところがありました、一か所は、台車に布団や傘が乗せてありました。もう一か所は、床面積がコンパネ１枚分くらいの小屋というか、四角い箱のようでした。どちらも、その後の夜回りで訪問し、２人の人に会うことができました。気が付かない場所にもっといはるかもしれません。

病院訪問は、毎週の訪問は休んでいて、知った方が入院した時だけ訪問しました。

定例ミーティング

実行できたのは３回だけでした。４月（役割分担）、８月（メーリングリストのこと）、11 月（冬の用意、下着セットの準備。越年で担当する炊き出しの準備など）。集まるのが難しいので、ネットでのミーティングはできないか、とか、ネットカフェで暮らす人に困ったときに相談してくださいと伝えられないかなどと考えていますが、まだできていません。

時々、ネットカフェにいるが金が尽きて、今夜寝る場所がない、とか、コンビニで働こうと思うが、連絡先がないとだめなので、連絡先になってほしい、などいう電話があったりします。

夜回りの周辺

以前野宿していた友人から電話がありました。「K さんが死んだのを知っているか？」　暑い時期なので、発見されたとき、すでに腐乱していて、ハエの幼虫が！とのこと。僕も一人暮らしだからそうなりそう。大家さんは片付けが大変でした。人は死

ぬ、身寄りがなければ始末も大変です。不動産屋さん・家主さんは、65 歳以上だと近くに見守りする人がないと貸さないそうです。　神戸 YWCA の介護事業所「まごの手」は 19 年秋から、部屋を借りることの困難な人のための、「居住支援事業」に取り組んでいます。保証人がない、初期費用がない、身寄りがない、高齢、障害がある、等々、野宿していようといまいと、住まいを確保しにくい人はいます。これまでの家賃が払えなくなったり、退去を求められたり、生活保護基準以上の家賃のところに住んでいると、福祉事務所から、安いところに転居せよと言われたり、事情は様々ですが・・・。

市長への手紙を 2 回送りました。1 回はネットカフェで暮らしている人の調査をしているか質問しました。検討はしているが、まだ実施していないという返事でした。

台風 19 号の時、東京・台東区は避難所を設けましたが、野宿している人が入るのを拒否しました。その人は嵐の中で避難所の外で夜を過ごしたそうです。全国からひどいではないかという非難の声が送られ、台東区は謝罪しました。しかし、TV などで、「自分は（野宿の人が入るのは）嫌だ」という人がいました。1995 年の地震の時、神戸市は避難所から追い出したので、今どう考えているのか市長に質問の手紙を送りました。（4・5 ページに掲載）

これに関して、思い出すことがあります。ある人が入院した時、同室の人にはお見舞い（お菓子や・果物）が来る、それを同室の人におすそ分けする。皆そうするが、自分には見舞に来る人がないのでお返しができない。お返しできる人は苦痛を感じないが、受け取ることが苦痛だという場合もあるのです。

避難所に入っても、差別されるから入りたくない、という人もいます。

野宿を取り巻く状況は、ますます厳しくなっていると感じます。野宿できる場所がどんどん小さくなっています。公園などの管理が民間企業に委託されると、「公的」な、誰もが利用できる場所から、企業の来てほしい人だけが利用できる場所に変質します。いまや、公の消滅はますます加速している。役所の仕事が外部に委託され、企業の論理で運営されるようになっています。その背後にある、新自由主義的な、経済優先の仕組みが人間を押しつぶそうとしています。いまや、自助、共助、公助といわれる。まず自分で何とかしなさい、次にそばにいる人が何とかしなさい。政府が何かするのは最後。なんでも自己責任だというわけです。自分で何とかしようとしても、労働の状況が酷くなっている。安倍首相は「非正規という言葉を使うな」と言いました。現実は、非正規雇用どころでなく、いまはフランチャイズや、個人事業主という形で、雇用関係さえない、何でも自分の責任という働かせ方が拡大しています。オリンピックのころ、消費税の軽減措置も終わり、貧しい人の問題が深刻化するのではないかと心配です。

ある人が、自分の最後の着物も、困っている人にあげたい、という歌を詠みました。感動を呼ぶ歌です。ある人は、困っている人に自分のものを全部あげたら、今度は自分が物乞いしなければならなくなる。社会的に解決すべきだといいました。そういう考えが、どんどん弱体化していることが現在の問題だと思います。

活動の状況（2019 年1月～12 月）

	最多	最少	合計	平均
参加者数	6	2	83	3．5
前回	6	2	106	3．1
訪問先	5	2	80	2．3
前回	5	2	91	2．7
会った人	3	1	58	2．4
前回	3	2	69	2．0

註1　前回は 2017 年 8 月～2018 年 12 月の 16 か月なので総数は多い

註2　今回は夜会えない人を翌朝訪問しているので実際は 1 人多い

2019年 10月 15日

神戸市長　**久元喜造様**

神戸市中央区

野々村耀

電話　078－261

避難所からの排除をめぐって。

今回の台風19号は各地に大きな被害をもたらしました。心痛むことです。地震や台風などの災害そのものは、自然現象であって人力でどうにもならない場合も少なくありません。

しかし、災害時に、人間が禍を大きくすることもいろいろあります。人災というべきです。

今回、東京都台東区では、避難所を設置したが、避難所に入ろうとした男性が、入所を断られ、台風の中、屋外で夜を過ごすという人災がありました。現場の職員は区長（災害対策本部長）から、「ホームレスは入れない」（厳密には、区民以外はいれない）という命令を受けていたとのことです。

私たちは1995年の阪神淡路大震災の時に、神戸市でも、同様のことがあったことをはっきり記憶しています。避難所に入れてもらえないケース＊、避難所に入ったが市の指導で「不適格者」とされて、出ていくように指導されたケース、すでに入っていて出たくないという人が、入所者に配られた食事を与えられなかったケースなどを、直接見聞きしました。今回それが再現されたわけです。＊中には市の職員でなく、市民が「あんた町内のもんとちゃうやろ」と拒んだこともあった。人権啓発の必要があると思います。

ホームレスの自立支援特措法は「ホームレスの人権を尊重する」という立場を明らかにしましたが、台東区は「区民でない」ことを理由に、あの暴風雨の時に避難所に入ることを拒否しました。大変驚きました。

それで、以下の４点についてお尋ねします。

1　神戸市は今も「ホームレスは不適格者」だと考えていますか？　次に避難所を設置する必要が起こった場合に、同じことを繰り返しますか？

2　ネットカフェ、終夜営業の浴場などで寝起きしている人、住み込みで働いている人、友人知人宅に居候する人など、安定した住まいを持てない人は少なくないと思われます。そういう人も緊急の場合、避難所に受け入れるなどの必要があると思いますが、いかがでしょうか？

3　以前ネットカフェで暮らしている人が市内にどれくらいいるか調査をしてほしいとお願いしましたがいかがでしょうか？

4　市民の人権意識向上のための取り組みはなされていますか？

神危第１５４４号
令和元年１１月１９日

野々村　耀　様

神戸市長　久元喜造

「市長への手紙」でご意見いただきました件について、回答いたします。

【①②について】

神戸市地域防災計画では、風水害による災害が発生する恐れがあり、避難情報を発令する場合は、住民等が生命の安全確保を第一として、緊急的に避難するための緊急避難場所の開設を行なうこととしております。

ホームレスの方も同様に、災害発生時には緊急避難場所へ避難していただきますが、被災状況を確認していくなかで、施設への入所や住居の確保など、必要な支援に繋げられるよう、適宜対応するものと考えております。

【③について】

ネットカフェにホームレス状態で宿泊している人への調査については、国の動向を踏まえつつ、調査のあり方等について検討を進めていますが、実施には至っておりません。

【④について】

市民の人権意識向上の為の取り組みとしては、「第3次神戸市人権教育・啓発に関する基本計画」（平成28年度～32（令和2）年度）に掲げる「ともに築く人間尊重のまち」をめざした啓発・教育に取り組んでおり、人権に関する講演会・映画会の開催、啓発ポスターの掲出、冊子・チラシの配布などの事業を実施しています。今後も、国との連携を図りながら、人権啓発事業を推進していきたいと考えています。

担当：危機管理室
078-322-6232

参　加　者　の　声

～育児休業を取得して～　中村 祥規

2019年の夏、長女が生まれたことに伴い、７か月の育児休業を取得した。父親としての私への妻の評価については自信がないが、一日一日成長していく娘と一緒に過ごせたことは、私にとって一生の大きな財産になった。

育児休業の期間は、育児休業給付金を受給した。制度の詳細については、インターネット上にも詳しい解説がいくつもあるのでそちらに譲るが、おおざっぱに言えば、1歳未満の子どもがいる保護者が育児のために休業した際に、雇用保険から支給されるお金だ。６か月までは所得の67%、７か月目以降は50%が支給される。夫婦ともに育児休業を取得した場合も、それぞれが受け取れる。

利用してみてあらためて思ったが、正社員として働く私たち夫婦にとっては、とても有り難い制度だった。所得の67%ないし50%というと、貯金を取り崩したり、支出を切り詰めたりするイメージかもしれないが、実際の手取り収入としては、もう少しゆとりがある。というのは、①給付金には所得税が課税されない、②育休中は社会保険料の支払いが免除される、といった規定があるからだ。おかげで、当面のお金について大きく困ることはなく、育休期間を過ごすことができた。社会保険が、自分たちの生活を支えてくれるセーフティネットであることをあらためて実感した。

ただ、私たち家族というミクロの視点ではなく、多くの子育て中の世帯が直面しているであろう状況を考えると、複雑な気持ちになった。こうした所得補償を受けられないまま子育てに取り組んでいる人が、大勢いるからだ。まず、育児休業給付金は、雇用保険に加入していることが条件であるため、雇用保険に未加入の人（週20時間未満のパート労働者やフリーランスで働く人など）は、受給することができない。また、育児休業は育休取得後に復職することが前提なので、女性が出産にともなって退職したケースも受給できない。

要するに、給付金を受給できるのは、育休取得前の時点で比較的安定した雇用に就くことができていて、かつ復職のめどが立っている人なのだ。生活が比較的安定している人が支援制度を利用できて、不安定な人が利用できないというのは、セーフティネットとしてはあべこべだ。セーフティネットを利用できる人と利用できない人との間で、かえって格差を拡大・固定しているとさえ言えるかもしれない。小さな子どもがいれば、手間やお金がかかるのは、どの家庭でも同じだ。子育て前・子育て中の就労形態にかかわらず、すべての子育て世帯を支援する枠組みがもう少しあればと思う。

また、誰かを支援する制度ができても、支援対象から外れる人が出てくる、そこから外れた人が一番困っているという構図は、夜回りの活動の中でも、何度も目にしたことでもある。それほど、こうした「あべこべな構図」は、私たちの社会に浸透してしまっている。そのことを思うと気が遠くなるが、せめて、身の回りに起きているこうした矛盾に「おかしい」と思う感覚は持ち続けたいと思う。

2010～2014年にかけて第１子出産を機に離職した女性の割合は、46.9%（参照：内閣府男女共同参画局, 2018,「『第１子出産前後の女性の継続就業率』及び 出産・育児と女性の就業状況について」

http://wwwa.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_45/pdf/s1.pdf

～排除の理論～　　箕田　尚

神戸 YWCA の夜回りに参加するようになったきっかけは「神戸冬の家」の炊き出しボランティアです。夜回りにて野宿者支援をしている団体があることを知り、代表の方の連絡先を教えていただきました。京都から兵庫に単身赴任で来ている私は仕事が忙しく、連絡先を教えていただいてから１年近く経過してからの参加になりました。「神戸冬の家」の炊き出しと異なり、夜回り準備会が把握されている野宿者への個別訪問でした。おにぎりやコーヒー、カイロ、必要であれば衣類や肌着を手渡し支援する活動です。

夜回りに参加して、野宿者支援に関わっていなければ知り得ないことがありました。

一つ目は公園のベンチにある、あきらかに後から施工されたであろう、ベンチ中央に据え付けられた「手すり」。普段から気にも止めていませんでしたが、その「手すり」の持つ意味は野宿者がベンチで横にならないようにするため、税金で賄われたものです。つまり、行政側の「ここで寝るな」と言った強いメッセージを示しているのです。そのことを知ってから街のあらゆるベンチの中央に「手すり」があることに気づきました。

二つ目は歩道橋下に囲われたフェンスです。歩道橋の下で雨露をしのいで野宿者が寝泊まりできないようにするため、同じく税金を投入して施工したものです。ここにも行政側の「ここで寝泊まりするな」の強いメッセージが示されていることを知りました。確かに、街並みの歩道橋の下、いたるところで囲いフェンスが施されていました。

ベンチの手すりに歩道橋下のフェンス、かなりの税金が使われていると考えます。行政の野宿者に対しての「手を差し伸べる」のではなく、「排除する」姿勢が伺えます。

誤解を恐れずに言うと、以前に読んだ本にこんなことが紹介されていました。テレビ番組で「乞食」発言があると、番組で不適切な発言があったとアナウンサーがお詫びします。何故「乞食」が不適切発言に該当するか、その作家さんが問い合わせたところ、その回答が「日本は福祉制度がとても手厚く行き届いている福祉国家である、その福祉国家には乞食という者は存在しない、存在しない者を言うのはおかしいから不適切発言に該当する」だそうです。そこに存在しているのに、あたかも存在していないかのように言われているのです。

ここにも野宿生活を余儀なくされている方々への「排除する」姿勢が見られます。

野宿生活や病気、障害などは、誰一人として望んでなった人はいないのです。「神戸冬の家」での亡くなった野宿者の方々の追悼集会で、お坊さんの講話でこんなくだりがありました。

「花を花と呼ぶなかれ、木を木と呼ぶなかれ。」そう、私たちはどうしても総称として野宿者の人たちと言ってしまいがちですが、個々に事情を抱えそういった生活を余儀なくされているのです。夜回り準備会の個別訪問では、支援対象者へは「名前」でお声がけしています。置かれる立場こそ違えど、個々に○○さん△△さんと呼び、おたがいの人権を当たり前に尊重されていました。これは夜回りに参加して、私が一番強く感じたことです。

今の社会にある「排除の論理」、一人ひとりが人権についてもっと向き合えば、こんな発想はありえませんし、あってはならぬものと考えます。

手すりのついたベンチ

～今、気になっていること～　牛江真由子

大規模なリストラの話をニュースでよく見かけるようになった。2019 年 4 月から外国人労働者受け入れの新制度がスタートしたにも関わらずである。国内の人手不足が新制度スタートの理由なのに、このままいくとリストラされた人と外国人労働者のどちらも転職市場であふれてしまうのではないか。しかし、日本人より安い賃金で働かせるために外国人労働者の受け入れを大幅に緩和したという説も聞くので、もしそれが本当であれば、日本人労働者の手が余っていたとしても、その人たちは採用されないということになりそうだ。

私が気になるのは、リストラが「堂々と」行われていることだ。職を失うことは社員の人生の一大事だが、企業の生産性向上の名のもとに堂々と行われている。「リストラを断行しなければ、会社が存続できない」という状況なら仕方ないが、まだそうなってもいないのに、今後の経営のためにリストラをするという企業もあるらしい。経営者は、何か大事なものを見失ってはいないだろうか。

利益率、効率、生産性、コストパフォーマンス…いつの頃からかよく聞くようになった言葉たち。これらを良くすることは確かに大事なことだが、ただ単に上を目指すだけでなく、そうではないものを切り捨てるという方向に向かっていないだろうか。それが現在の社会の息苦しさ、多様性の排除につながっていっているような気がする。

書店に行くと、仕事に関係するものから生き方に関するものまで、あらゆる分野で向上するためのハウツー本のようなものがたくさん並んでいる。これは、それだけ自分を高めたいと（もしくは、このままではダメだと）思っている人が多いということの裏返しでもあると思う。しかし、常に社会から能力の向上を求められていると捉えると、プレッシャーとともに、窮屈さを感じる。「能力の低い人はいらない」というメッセージと受け取ることもできるからである。

ところで、一億総活躍を目指すと現政権が言っているが、これは効率重視と相性が悪いように思う。際限なく効率を上げ続けると、それについていけない人がどんどんこぼれ落ちて、かえって活躍できない人が増えていくのではないだろうか。みんなが活躍できるような体制を整えてから目指すべきだと思う。

一億総活躍の流れで出てくるのが、高齢者も働きましょうという定年延長の話である。しかも、ゆくゆくは定年がなくなるという説も出てきている。一般的に、高齢になるといろんな能力が衰えてくるものだ。働きたい人は働けばよいが、少なくとも若い時のようには働けないだろう。しかし年金は当てにならず、生活のために仕事せざるを得ない状況で働くとすれば…活躍という美しい表現はあてはまらない気がする。若い人でも、生活のために仕方なく辛い仕事をしている人は少なくないはずで、高齢になると更に仕事を選べないのではないかと、心配になる。しかし、仕事内容や働く場所はその人の人生にとってとても大切なことなので、ある程度選ぶ権利は保証されるべきだと思うし、高齢者の就職を促進するとすれば、年齢に見合った仕事内容でなくてはならないと思う。特に、現在のようにブラック企業が横行しているような状況では、就職することによって命の危険につながることすらあるのだから。

「選ばなければ仕事なんていくらでもある」という考え方は、とても暴力的だと私は思う。人には向き不向きというものがある。就職した会社がブラック企業の場合もある（入社前にブラック企業かどうかを見極めるのは難しい）。他にも、家から通える範囲か、生活していけるだけの給料か、今求人が出ているのか、諸々の条件を加味すると、意外と選択肢は限られてくる。しかも、やっと見つけて応募した仕事でも、不採用になるかもしれないのだ。就職先を見つけるというのは、案外難

しい。実は、私も以前は「就職しない人は仕事をえり好みしている、我儘な人だ」と思っていた。しかし、転職でいくつかの職場を経験するうちに、それは間違いだと気づくに至った。仕事を選ぶことは当然の権利で、我儘なことではない。仕事（職場）はやはり選ぶべきである！

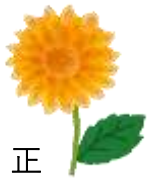
仕事は、住まいにとても大きな影響を与える存在だ。仕事は収入を得るための大事な手段で、収入が多いとそれだけ住まいの選択肢が広がるし、仕事を失うと収入もなくなり、住まいを失うことにつながる。

住んでいる賃貸住宅が年齢や収入の額によって更新を許可されず、住むところを失うかもしれないと話している高齢者をテレビで見た。ひどい話だと思う。賃貸住宅は保証人がいないと借りられないこともあるので、頼れる親族が少ない人にとっても住まいの問題は深刻である。

今の日本は将来への不安を強く感じさせる社会なので、若いうちから貯蓄に励んだり、常にスキルアップを目指して勉強したり、頑張って条件のいい（収入の多い）パートナーを見つけて結婚したり、子どもに受験勉強をさせて高学歴を身につけさせようとする人がたくさんいる。

こんなにも将来に不安を感じさせる社会は、果たして良い社会なのだろうか。

柵で仕切られた歩道橋



～夜回りへの参加～　　島村　正

さること 25 年、阪神淡路大震災。みるみる私の周りから住む人が消えていった。来る日も来る日も家が倒れる音がする。そんな時、生活を、後の再建を、支え励ましてくれたのが、ボランティアの人々、親戚、知人、そして自衛隊に神戸市。今でも感謝している。少しでも恩返しができればと神戸市のボランティア活動に参加することにした。しかし募集人数オーバー。職員さんに相談したらヘルパーの資格を取ることを勧められ、紹介された養成講座が神戸 YWCA。ここから長い付き合いとなる。2000 年、何故かヘルパーの道へ。ヘルパー18 年、ケアマネ 6 年、事務の仕事は今も神戸 YWCA まごの手でお世話になっている。夜回りに参加するきっかけは、YWCA の機関紙に「夜回りのメンバーがいない」という野々村さんの記事。ヘルパーの経験が役に立つのではないかと思い、参加することにした。

夜回りをしていると見えてくるものがある。公園のベンチの手すり。歩道橋の下の柵。座りやすくしているのかな、物を置くのかな、よく聞いてみると「そこで寝泊りするな」という影が見えてくる。「皆と同じようにしろ」とでも言っているようだ。攻撃する若い人もいる。

近頃、自分の目線でしか考えられない人、大きな声を出せば物事が通ると思っている人が増えたように思う。人それぞれ育った社会や周りの環境歩んだ人生、全く違ったもの。その人生、思い描いた人生ではなかったかもしれない。人それぞれの思いや主観は違って当たり前。相手の側に立って物事を見合い、互いに理解しあえればいろいろな問題は少なくなるのではと思う。

横断歩道で重たい荷物を持った老人。「お持ちしましょうか」と声をかける。小さくてもいい。助け合う心が、社会が、数珠つなぎに続いて行ってくれれば。その数珠の一つの珠になれればと思っている。

～ボランティア活動についての いくらかの疑問～

野々村　耀

麻生副総理が「ナチの手口に学べ」といったとき、それを非難する声が上がり、すぐに撤回された。しかし、それが何を意味するかという議論はなかった。池田浩士さんの「ボランティアとファシズム」という本を読んで、ひどく気になっている。ナチスの労働奉仕が自発的なものから、義務的なものに変わっていく。無償の自発的労働が「国のための自己犠牲」として推奨され、他方で自発的に参加しないものは「非国民」とされ、非難される。民族の一体化のために犠牲を払うことが生きがいになる。日本では（僕の子供時代には）勤労奉仕といわれた。オリンピックのボランティアなど、まさに「手口に学んだ」ものだろう。もちろん災害ボランティアにも同じことが言える。民族のため、国のため、自分を犠牲にする。この本を読む２年ほど前に、ある雑誌に以下のような投稿をした。少し手を加えたが、一緒に考えていただけたらと思う。

ボランティア活動についてのいくらかの疑問

1995 年、 神戸とその周辺を大地震が襲った。多くの人は住まいを失いホームレス（住まいのない人）になった。私は、直後は地震の被害者が同じように住まいを失って苦しむ仲間として、家のない人（ホームレス）を理解するようになることを希望した。

私は被災者を応援しに神戸に来て、ある救援グループに参加した。そこでは、釜ケ崎から来た日雇い労働者の青年が活動していた。

私たちはその状況の中で、震災前から野宿していた人たちが救助・救援対象になっていないことを知った。避難所に入ることは拒絶され、避難所に入った人は追い出され、出ないという人は、皆に配られる食事をもらえなかった。

地震によってホームレスになった人たちの多くは、「私たちは被災者であって、ホームレスではない」と、以前からの差別感をもったままだった。

神戸市は避難所の管理者に震災前からのホームレスを不適格者と呼んで追い出すように命じた。そうした差別を批判すると「ボランティアは当局を批判するべきでない」と言われた。神戸市はボランティア活動センターを設立し、センターが「ボランティアに相応しくないと」考えると、情報を与えなくなった。私たちはボランティアとは何か考えるようになった。

1995 年は日本のボランティア活動元年といわれ、NPO 法ができるきっかけになった。

2000 年に教育改革国民会議は、小・中学校の生徒にボランティア活動を義務化するべきだとする中間報告を出した。多くの人が「義務化はボランティアに相応しくない」と反対した。その中間報告は実現しなかった。

2006 年に教育再生会議が、次年度の授業計画に奉仕活動を含めるよう提案した。今回も提案は実現しなかった。

2011 年、東北地方を大地震が襲った。そのとき政府は大学に対して、ボランティア活動に参加する学生に単位を与えるように要請した。

政府は繰り返して、政府が人々を動員することを可能にする意図を表明した。

最近政府は、東京オリンピックのボランティア活動に対して人々を勧誘している。政府は大学に対して、そのイベントと時期が一致する期末試験の時期を変更するように、またボランティアしたい学生に単位を与えるように要請している。

政府はマラソンランナーが走る道に沿って、日の丸の旗を振って応援する生徒・児童を集め、小学校を含む学校や、企業や医療機関などに対してボランティアを出すように要求している。大規模なボランティアの動員は、私にはより恐ろしい動員の序曲に思える。

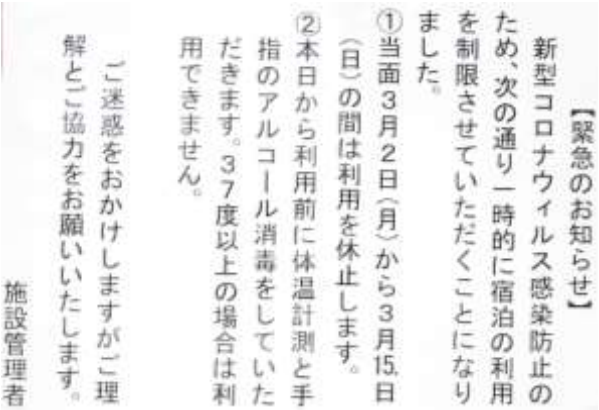
かつて大日本帝国は、学生や生徒たちを兵器工場などに動員した。私は当時の女学生から大砲の弾を磨いたとか、風船爆弾を作るために大きな紙にこんにゃく糊を塗ったという話を聞いた。男たちは戦場に動員されたので、女性たちが様々な分野で働かなければならなかったのだ。多くの若者たちが自殺飛行機やボートで死んだという話もよ

く聞く。これらの兵士たちも自発的に志願したといわれているが、最近、そのような攻撃の生き残りの人たちは上官からの、その攻撃にボランティアとして参加するかどうか聞かれたときに「否」と答えることはできなかったと証言している。

私は本当に自発的な活動は疑っていない。しかし、ボランティアの善意が国に利用された歴史を見ると、安心できない。

麻生副総理は「ヒトラーも若者達の自発性を彼の目的のために利用した」ことに学んで、ボランティアを利用しているのかもしれません。今の政府は、国会抜きの閣議決定で、森羅万象を思うままに支配している。それも、ナチスに学んだ手口ではないか？

閉鎖のお知らせ



【緊急のお知らせ】

新型コロナウィルス感染防止のため、次の通り一時的に宿泊の利用を制限させていただくことになりました。

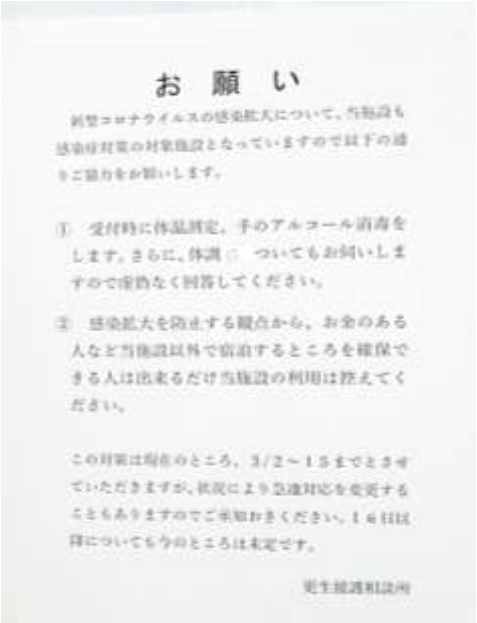
①当面3月2日(月)から3月15日(日)の間は利用を休止します。

②本日から利用前に体温計測と手指のアルコール消毒をしていただきます。37度以上の場合は利用できません。

ご迷惑をおかけしますがご理解とご協力をお願いいたします。

施設管理者

閉鎖撤回の告示



お　願　い

新型コロナウイルスの感染拡大について、当施設も感染症対策の対象施設となっていますので以下の通りご協力をお願いします。

① 受付時に体温測定、手のアルコール消毒をします。さらに、体調 ついてもお伺いしますので虚偽なく回答してください。

② 感染拡大を防止する観点から、お金のある人など当施設以外で宿泊するところを確保できる人は出来るだけ当施設の利用は控えてください。

この対策は現在のところ、3/2～15までとさせていただきますが、状況により急遽対応を変更することもありますのでご承知おきください。16日以降についても今のところは未定です。

更生館運営協議会

越年越冬炊き出し風景

会計報告

（自：2018 年 4 月 1 日　至：2019 年 3 月 31 日）

収入の部

項目	金額（円）	備考
寄付金	247,067	
助成金	84,784	
合計	331,851	

支出の部

項目	金額（円）	備考
物品費	25,418	越年越冬炊出食材、下着、蚊取線香、カイロ、飲み物等
印刷製本費	29,855	活動報告書印刷費
通信費	9,841	報告書発送費
支払寄付金	30,000	神戸冬の家越年越冬活動協賛金
管理費	234,427	分室・車両維持管理、人件費
支払手数料	2,310	振込手数料
合計	331,851	

寄附・寄贈報告

（自：2019 年 3 月 1 日　至：2020 年 2 月 29 日、敬称略）

東昌宏　井上みち子　入江さん　岩崎滋　大川妙子
小倉覚　岡山直道　川辺比呂子　黒木雅子
神戸栄光教会社会委員会　佐伯かをる　斎木彰
島村正　武田多美　田平正子　高橋智子　鶴崎祥子
中田洋子　内藤進夫　中島昭子　中島紀子
中村祥規　　長澤毅　新田隆充　二宮百合子
野々村耀　西山秀樹　藤岡正雄　三浦啓子　箕田尚
宮地京子　森原寄指子　山本容子　吉田亜希
吉田英三　米岡史之　匿名（数人）

※　寄付のほかに、おにぎりづくり、夜回りのドライバーなどをしてくださったり、ガスボンベ、衣類、靴、寝袋、毛布、リンゴなどをいただきました。ありがとうございました。

※ 万一、お名前の漏れや間違いがありましたら、ご一報いただけるとありがたいです。

神戸ＹＷＣＡ夜回り準備会（仮）ニュースレター2020　活動報告書 vol.15

発行：神戸ＹＷＣＡ夜回り準備会（仮）
発行日：2020 年 3 月 31 日
編集：島村　正　梅澤昌子　野々村耀

参加者募集：月 2 回（毎月第 2・第 4 土曜日、18 時～）活動しています。特にドライバーを担当いただける方、歓迎です。
カンパ募集：備考欄に「夜回り準備会（仮）の活動のために」と記入のうえ、下記の神戸 YWCA の口座までお振込みくださ

今回の報告書は、「2019 年度 NHK 歳末助け合い義援金」の助成を受けて作成しました。

郵便振替口座 01100-0-10298 公益財団法人神戸YWCA
三井住友銀行 三宮支店 普通 1015232 公益財団法人神戸YWCA

神戸YWCA 夜回り準備会
e-mail: yomawari@kobe.ywca.or.jp

公益財団法人 神戸YWCA
本館 〒651-0093 神戸市中央区二宮町 1-12-10
tel. 078-231-6201 fax. 078-231-6692
e-mail: office@kobe.ywca.or.jp www.kobe.ywca.or.jp
分室 〒651-0063 神戸市中央区坂口通 5-2-16
tel. & fax. 078-221-5111 e-mail: bunshitsu@kobe.ywca.or.jp

2020年、神戸YWCA創立100周年

YWCA
（ワイ・ダブリュー・シー・エー Young Women's Christian Association）は…
キリスト教を基盤に、世界中の女性が言語や文化の壁を越えて力を合わせ、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現する国際 NGO です。